

にいがた

# 北から南から



戦争への道を阻むため、  
ネット情報という武器を  
頼りにしています

牧野 秀樹

ノーベル平和賞の受賞予測に、「憲法9条を保有する日本国民」が急浮上しましたが、パキスタンのマララさんとインドの「子供たちの人権擁護」家に送られました。

「憲法9条にノーベル賞を」は、昨年、神奈川県座間市の一主婦が始めた運動です。地元の9条の会の人たちをはじめ、支援の輪が広がり10月に入り41万人を超えました。わたしも、今年の4月にネットで署名者に加わりました。

今年はダメでも、数年後1000万人を超える賛同署名を集め、アメリカ政府や日本政府・与党の「受賞」反対の思惑に打ち勝って、

日本国民の総意で堂々と受賞する日を迎えた  
いものです。

10月19日、池田香代子さんのツイッターで、「ヒロヒト天皇：操り人形ではなく操る側であった」という、ハーバート・ピクスの「昭和天皇実録」発表を受けての論説記事を知りました。

また、本田由紀さん（教育社会学）のツイッターで、歴史学研究会の「慰安婦声明」と「尾木ママのファンになってしまえそう」を見つけてきました。この教授は、良質な資料（教育関係に止まらない）を毎日のように発信。とても参考になります。

「（耕論）揺らく国民国家」（朝日新聞）10・4：「たとえば、あれだけ石油が出る中東で、なぜ大勢の人がいまだに貧困にあえいでいるのか。どう考えたって、国際石油資本とそれに連なる王族や独裁権力者に富が偏在しているからですよ」「共産主義に勝利して、資本主義と資本家はあまりにも貪欲（どんよく）になりすぎました。資本の増殖に血道をあげ、



過剰で不公平な競争を押しつけて、人の気持ちを顧みなくなつた。その結果が、格差を極端にまで広げたいまの世界です」いづれも、佐藤優（外務省のラスプーチン）です。

「近代の国民国家はたかだか200年の歴史しかありません。その枠組みがほころびてきているのに、しがみつこうとすることが、いま暴力（ガザ攻撃）として噴出している。イスラエルはその典型です。多文化の包摂が不可避である以上、国民国家が変容していくことを受け入れ、順応していくことが必要なんです」「また、兵器の実験場という意味合いもあるでしょう。イスラエルは最新の武器の開発国でもあります。開発した武器を実戦で使い、効果を確かめるわけです。また、国の大きさをからすると不自然に大きな軍事予算をもつ軍事国家です。一定周期で大規模な軍事行動がないと、その必要性を訴えることができないという事情もあります。一方的な殺戮になろうとも、何らかの「正当性」を見つけて軍事行動に走る。ガザは格好の場所とし

て繰り返し餌食にされています」、いづれも、早尾貴紀（東京経済大学）です。イスラエルを多国籍企業の「軍産複合体」に、置き換えた方が本質的ですね。

政治的立場が対立している2人を登場させて、戦争の絶えない世界情勢と戦争を必要とする政治勢力を活写しています。

ところで、件の『朝日新聞』ですが8月、唐突に慰安婦問題で「過去の記事」を訂正しました。待つてましたとばかりに、読売、産経や安倍首相、極右勢力の攻撃を受けました。一方、北星学園大学は、「大学の自治を侵害する卑劣な行為には、毅然とせんとしして対処する」との学長文書（9・30）を出して、脅迫に屈しない意思を表明しました。また、「インドネシア慰安婦」で「強制売春、何の疑いもない」とオランダ外相は日本人記者を集めて会見しました（10・5）。

「従軍慰安婦（日本軍用性奴隷）」問題は、『歴史を偽造するものは誰か——「河野談話」否定論と日本軍「慰安婦」問題の核心』（し

にいがた

# 北から南から



んぶん赤旗』9・27)で十分解明されていま  
す。

『朝日新聞』のトップは動揺しているよう  
ですが、朝日には優秀な人材が目白押しです。  
極右勢力の攻撃にたいして賢明な反撃を成功  
させるでしょう。

以下はそれらの記者や毎日のように、ツイッ  
ター・ブログをたよりにしている知識人たち  
です。田中宇、孫崎享、金子勝、「世に倦む  
日々」、有田芳生、冷泉彰彦、酒井啓子、宋  
文洲、藤原直哉、本田宏、水島朝穂、五十嵐  
仁、駒木明義、吉岡桂子、金順姫、大久保真  
紀、「めいろま」、大隅典子、小野昌弘、伊東  
乾。

ネット情報はわたしの思考回路の糧になっ  
ています。

(まきの ひでき・新潟市)

## 「南京再訪」

菊 埼 威

今年の6月に中国南京市を訪れた。昨年7  
月に離れて以来1年ぶりのことで、勤務して  
いた大学の卒業式に参加するためである。

生まれ育った故郷に帰るとき、見慣れた風  
景が目飛び込んでくるにつれ、妙に胸が高  
鳴るものだが、今回も似たような感情を味わっ  
た。5年間も住み、日本では決して体験する  
ことのない、さまざまな出来事に会ったせ  
いだろうか、上海駅から新幹線に乗り南京駅  
に近づくにつれ、高揚した気分になり、そわ  
そわと落ち着かない。降り立った南京駅の人  
混みも騒々しさもなつかしい。

卒業式は例年通りに始まった。学士服をま  
とった卒業生が学部ごとに学部旗のもとに、